

牧師所感： 　　仏教徒の作家五木 寛之氏の言葉

私は仏教徒の作家 五木 寛之 氏を尊敬している。一度もお会いしたこともないが、尊敬する理由は多々ある。その一つ二つを宣べれば、次の如くである。先ず、氏は1931年お生れで、私より2才も上の兄貴分でいらっしゃる。日本以外でお生れになり、第二次世界大戦後、ヨーロッパから朝鮮を通って引き揚げた先輩である。私なぞ髪の毛も薄くなりはげ頭に近いが、氏の頭の毛髪はふさふさである。特に氏を尊敬するのは大量の本を出版されたことである。私は幾冊も購入して読んで来た。その内、仏教の有名な和尚さま親鸞の著作を始め、沢山の御本を読んできたが、どの本も私は教訓となった。特に私がよく読んでいるのは、氏の書いた『折れない言葉』集である。その中に珍しくキリスト・イエスの御言葉を発見したからである。氏はキリスト者ではないが、主（私）イエスの有名な説教を氏の折れない言葉として、採用しているので、主イエスを尊敬していると私は思う。で、ここにその章を転載する。

あすのことまで思いなやむな マタイ福音書 6章第34節

はざま
きのうときょうの狭間に

フランシスコ会の司祭である本田哲郎さんは、私にとって、はるか遠い人である。しかし、その言葉によってはげまされ、身近な隣人のように感じることがしばしばだ。聖書は、未来に託せと言っているのか、それとも過去に学べと教えているのか。そう問われて、本田さんはマタイ福音書の一節を挙げ、こう語っている。

「大事なことは今日、いまだということです。仏教風の言葉でいえば“一日一生”。今日一日が自分の一生と思いなし、そういう姿勢で生きよ。このメッセージに、私はイエスの言葉とも響き合うものを感じています」

過去にいろいろあったとしても、それはすでに現在の自分に集約されている。いまの私がいるだけだ。未来といつてもまだ未知数なのだし、今日の働きが明日をつくっていくだけである。だから、やはり今日なのです、と。

そして、ラテン語の *hic et nunc*（ここで、そしていま）という言葉に出会ったときのことを語って、「ここで、そしていま」どうするかが問題なのだという。
<あすのことは、あす思いなやめばいい。その日の苦労は、その日だけで十分である>という聖書の言葉に、ほっとため息をつくのは私だけだろうか。

今日だけでも、思い悩むことは山のようにある。決して投げやりではなく、あしたはあしたの風が吹く、というのではなく、今日一日、今日一日、と呟きながら生きていく。

以上、氏に幸あれと祈る。